

「今日はアンタの好きにしていよいよ」って
言ったら、敏感な身体に玩具と媚薬で
追い打ちまでかけられて好き勝手に
やり倒された

体験版

優男風ドS×強気ビッチ

受け：村井

攻め：仙波

要素：強気受け、玩具、拘束、媚薬、乳首責め、前立腺責め、尿道責め、亀頭責め、結腸責め、筆責め、焦らし、寸止め、連続絶頂等

しつこいくらいに構ってくるセフレに悩まされる生活が、あまりにも長く続いている。いい加減に関係を断ち切りたい俺は、次なる縁切り作戦に関して色々考えていた。

だが悲しいことに、俺がいくら頭をひねったところで無駄なのではないか、という思考にも陥っている。というより、おそらく俺の思考が奴を超えることはおそろくない。だから、回りくどく距離をとる小細工は行わないことにした。今回はあえての逆張りでいく。ただし、過去に自分から積極的に行ったらそれはそれで痛い目を見たので、ちょっと方向を変えようと思う。

今回行いう作戦は、「相手主体で欲求を全部発散してみたら、意外とそうでもなかった作戦」だ。

内容はこうだ。監禁や盗撮の危険性が少ない、俺が先にとったホテルの部屋に仙波クソ野郎を呼び出す。そして、とにかく思いっきり好きにさせてやる。よほどのこと以外は文句も言わず、NGも出さない。これで奴のMAX出力を発揮をさせる。それだけ全力でやったなら、「あれ？期待したけど村井君って所詮こんなもんか」と思うだろう。これで俺に飽きてもらう作戦だ。

どうせアイツの満足は、アイツにしか分からない。だったらいっそ難しいことは考えず、勝手に飽きてもらう方がいい。我ながら名案だったので、さっそく奴を安全なホテルに呼びつけようとした。

けれども俺が電話をかける前に、都合よく奴から電話がかかってきた。手間が省けて助かるので、今日は素直に出てやることにする。

「もしもし」

「あ、もしもし村井君？前に言ってた旅行の話なんだけど、そろそろ具体的に決めたいなって思ってた」

だが電話に出ると、俺が数えきれないほど無視している話題をここぞとばかりに切り出された。アンタとの旅行に行く計画を、俺が楽しく考えられると思うか？と聞いてやりたいが、おそらく奴は言う。楽しくなるように努力するよ、と。しかしながら楽しくなることは絶対にならない。どんな旅行先でも、有害なおまけであるアンタが必ずついてくるからだ。

でも、今日は許す。話す気はもちろんないが、話す気があるフリはしてやる。

「ああ、その話な。多分それ、電話じゃなくて直接会って話した方が早い気がする」

「確かにね。じゃあどこかのお店とか、どっちかの家で会おうか？」

「いや、今日はホテルがいい。俺が予約しとくから、仕事終わったら来てよ」

そして、奴が俺を誘うのには苦勞するが、俺が奴を誘うのは簡単中の簡単だ。田舎のザリガニより楽に釣れる。もはや餌なんてほぼないにも関わらず、奴がふと息を飲んだ気配を感じた。この様子だと、仙波一本釣りは見事に成功したらしい。その証拠に、俺の誘導にまんまとひっかかった奴は、少し口調を早めて嬉しそうに話した。

「何？どうしたの今日は。もしかして僕が誘われてる？」

「そう思ってくれていいよ」

「君にそんなこと言われたら、調子に乗るよ？」

「あっそう。で？今日はいけんの？無理なら別の日でもいいけど」

「夜の9時以降でもいいなら」

「なら9時な。ホテルの場所は送っておくから」

悪魔の割にはちょろ過ぎる釣られ方をした奴は、ウキウキした気配を電話越しにも伝播させていた。それが少々怖くもあるが、狙い通りでもある。これで開始前から期待値を高めてもらって、事後には是非特大級のがっかり感を抱いてもらいたい。

どうせホテル代は僕が払うと言うはずなので、扎扎实り後払いの高級ラブホを予約した。当然ルームサービスも勝手に使わせてもらう。もちろん全て奴の奢りになる予定だが、これくらいのうまみがなければやってられない。

待ち合わせに関しては律儀な男なので、奴が遅れてくることはなかった。連絡通り21時より少し前に、部屋の扉がノックされる。扉を開ければ、そこにはスーツ姿の仙波さんの姿があった。

「お待たせ村井君」

「うん。待ってはないけど」

そして求めている抱擁と頬へのキスで俺のテンションが急降下したわけだが、なるべく顔には出さずにおく。今日はまだ、奴に上機嫌でいてもらわなければいけない。本気を出したいと思わせないと、作戦が成功しないからだ。

部屋に入った仙波さんは、まずはジャケットを脱いでハンガーにかけていた。そんな彼に近づいて、ネクタイもほどこうとした背中に抱きついてみる。俺からのスキンシップに大きく体を揺らすのは、少しだけかわいらしい。

「なあ、今日さ」

「う、うん。どうしたの？」

「めちゃくちゃガツガツ抱かれないって気分なんだよね」

数少ないかわいげを俺に見せてくれた奴は、更に驚いたと書かれた顔で振り返った。抱きつきにくくなったので、今度はそのまま胸に顔を埋めた後、自分の目線より高い位置にある彼の目を見上げて言う。

「無理言ったのに来てくれてありがとな。今日は俺のこと、アンタの好きにしているよ」

ふふ、と軽く笑いながら、露骨な誘い文句を放った。ちなみに、昼間に言ったあの程度のお誘いで簡単に乗ってくる相手だ。場所も環境も整ったここで落としにかかれば、釣れないわけがない。

目を瞬時にぎらつかせた目の前の男は、俺をすぐさまベッドに押し倒して長めのキスをしてきた。既に臨戦態勢になっている股間を、俺も膝で少し弄ぶ。すると奴からも股間を押し付けてきたので、ノリノリだと思っていいだろう。

「どうしたの村井君。なんで今日はそんなにかわいいの？」

「俺は毎日かわいいけど」

「一応聞くけど、本当に何してもいいの？」

「いいよ」

「それはつまり、村井君がとうとう僕に心を許してくれたってこと？」

「あゝ あ？」

「おっと、これは勘違い」

ただ、奴の誤認だけは訂正させてもらう。残念だが、俺がアンタに気を許す日は一生こない。だから諦めろと遠回しに何度も伝えたのに、伝わらないからこうなっている。だが、それも今日で終わりだ。やりたい放題やって、俺としたい全てをやってもらって、そして飽きてくれ。なんだ、所詮こんなもんかと思ってくれ。

「まあ、難しく考えなくてもいいか。気持ちいい事しにきたんだからね、僕たち」

楽しげにシャツを脱ぐ奴の体は、今日も相変わらず整っている。顔と体だけは、すこぶるいい男なのに。性格が残念で自分勝手にクソ過ぎて終わっている。いい面と悪い面で、ある意味バランスがとれているとも言えなくないが、俺の手には余る。

ただし、この悪魔との付き合いも今日で終わりだ。頼むから俺なんてその程度と思って、今度こそ諦めて一切の連絡を断ち切ってくれ。そうじゃなければ喜んでアンタに足を開いたりしないと思いながらも、俺もバスローブの紐を緩めた。

だが、俺の見積もりはまたしても甘かった。好き勝手される覚悟は持っていたものの、文字通り仙波クソ野郎の好きにされた結果、俺はベッドの上から動けないほどイカされまくって、指一本で簡単に高みにつれていかれるほどに熟れ切ってしまった。

「ふ、ぐ、ッ、っっ...！」

「ほらほら、またいいところ擦るよ？」

「んゝ ～～～～ッッ！！」

もう2発出された中を、くにくにと撫でてくる指が気持ちよすぎた。ビクッとうつ伏せの身体がしなって、すぐに腰から下が痙攣する。もう中イキまで10秒も持たない雑魚過ぎる前立腺を責められるのが嫌で、俺は枕を噛んで、涙の滲む目を押し付けた。

「ん、んんう、うううう...っ！」

「もう何回もイッたから、イキ癖ついちゃったかな？」

「っ、ま、って、少し、待っ...！」

「へろへろな村井君を待ってあげたいのに、かわいいからもっとイカせたくもなっちゃうんだ。難しい気持ちなんだよね」

「ひっ、ッ、ああ、あう、っ、あ、あ、あっ、イッ、て、今、今あ...っ！」

「イッてるのに良いところ擦られてまたイッちゃうね？」

「～～～～っッ！！んんゝ ッ！んあ、あ、ああああああ...っッ！！」

何度も抱かれたからこそ分かるが、奴の指使いそのものは、全然本気を出していない。余裕も余裕で、その気になれば俺を徹底的にイカせ続けることもできる余力がたっぷりと残っている。なのに軽く擦ることにとどめているのは、奴の優しさではない。あえて緩めに愛撫することで、俺がどれだけ敏感になったのかを教え込んでいるに違いない。

相変わらずの性格の悪さだ。こうやって言葉と快感で、俺を追い込む手腕も良くない。不要なはずの快感が、少しずつ物足りなく感じてくる。でも俺が更なる刺激を求めた時にはずっと引いていくんだから、本当の本当にいやらしい奴だと思う。

「んあ、あ、あ...？」

「ごめんね村井君。このままイカせ続けてあげてもいいんだけど、今日はちょっとしてみたいことがあって」

「したい、こと...？」

「そう。君が許してくれるなら、少し変わった格好で縛ってみたいんだけど、どうかな」

「変わった格好って？」

「ここほら、上の金具に縄が通せるようになってるから。使ってみたいなあって」

俺の中から指を抜いたアイツは、ぐったりとした俺にある提案をしてくる。俺としても今日はそれなりに覚悟を決めてきたので、縛られて犯されることくらいは想定していた。だから、奴がベッドの上の少し低くなった天井部の金具を指さし

た時も、げんなりはしたが断るつもりはなかった。心底嫌だが、今日は奴の全力を出してもらわなければいけない。ここまでイカせてから縛るなら、最初から縛っておけと喉元まで文句がせりあがってきたが、俺は我慢できた。出来る男だ、俺は。

「別に縛んのはいいけど。何？亀甲縛りでもして吊んの？」

「さすがの僕も、そこまで専門的な縛り方は知らないなあ」

「じゃあどうすんの？」

「普通にというか、君の手だけ縛って引っかけておこうかと思ってるだけだよ。それならそこまでハードじゃないでしょ？」

「手だけ？足は？」

「足は縛らないよ」

あとは、身動きが取れないほどガチガチに拘束されるんじゃないかと危惧したのに、手だけで終わると聞いて、逆に拍子抜けした。そのくらいだったら余裕だと、俺はすんなり奴の希望を受け入れる。

ホテルの情報を送った段階でそれなりに用意はしてきたのか、奴は私物の縄を取り出して、俺の手首を縛っていった。ちなみにコイツは、縛るのも上手い。ぎちぎちに固定するわけじゃないのに、全くほどけない不思議な拘束術は、なんちゃって縄師たちに教鞭をとれるレベルだと思う。

部分的に感心できる特技を見ながら黙って言いなりになっていると、俺の両手を縛る縄は天井の金具に通された。それから引っ張り上げられて、両手が胸の前に

きて、膝立ちになる体勢で固定される。ちなみに体勢としては、そこまでしんどくない。

「手、もっと高く上げておかなくていいの」

「見栄えとしてはそっちの方がいいかもしれないけど、長時間上げっぱなしだと痺れちゃうでしょ？」

器用に縛っていく仙波さんを見ているだけなのも暇なので話しかけてみたら、謎に常識的な答えが返ってきた。なんでそういう思考ができるのに、俺を労わることは下手なのかと思う。あとは、手のしびれを気にするくらいなら縛らなければ済む話じゃないのかとも思ったけれど、このあたりは会話するだけ無駄になるのであえて口にはしない。

そして俺の胸のあたりにも縄をかけ終えた奴は、背中のでところで天井にかけた縄を縛って、作業を終えた。ちゃんと乳首のまわりには、縄がかかっていないのも凄い。あとは自由に見えて、意外と稼働域は狭いなど、全てが整った後に思った。

だが、問題はここからだ。この悪魔が、なんの考えもなしに俺を縛って眺めて終わるはずがない。

「で？俺を縛ってどうすんの」

「僕ね、いつも思ってたんだけど。序盤からイカセまくった状態の君に、もっと追い打ちをかけたらどうなるか気になってたんだ。だから今日は、それを試してみようと思ってね」

「ひっ！！？」

背後でバックを漁る奴は、一体何を取り出しているんだろう。そう思いながら声をかけたら、俺の孔に何かを入れられた。ローターよりも小さくて、爪ぐらい固いそれは、一体なんなんだ。

「なっ、何、入れ」

「ああ、これ？これはキツめの媚薬。だんだん溶けてくるとは思うけど、落ちてこないように蓋するね」

「んうあっ！？」

しかし種明かしをされたら、もっと心配になった。いや、確かに薬を使われることも想定はしていたけれど。怖いのは、わざわざこの悪魔が「キツめ」と言ったことだ。アンタがキツいって言うならよっぽどじゃないかと、軽く身を揺すって外に媚薬を出せないか試してみたけれど、すぐにアナルプラグを入れられてしまった。返しがついていてそれは抜けにくいし、付属品なのかバンドで固定されて、絶対に自力では取れなくなってしまった。

「っ、ば、ばかっ、ヤバい薬だったらどうすんだよ！」

「でも好きにしていって言われたし」

「もう散々好きにしたらろ！」

「あれは前菜で、ここからがメイン。ほら、君が大好きなコレも持ってきたよ？」

「そっ、それ...！」

でも俺は、奴の好き勝手をどこまでも甘く捉えていた。ただコテンパンに俺を抱くだけでは、この悪魔は物足りないんだ。だから俺を疲弊させるアイテムを、奴は無数に用意していた。

わざと俺の前に回ってきた奴は、きらりと光る棒を見せつけた。それは俺が苦手な、尿道責め用のグッズ。もちろん見せるために持ってきたわけじゃないから俺に入れるんだろうけれど、奴は追加で何かを棒に塗り始める。

「なっ、なんだよ、何塗ってんだよ！」

「ん？ああ、これも媚薬。何も塗らないで入れたら痛いと思うし」

「普通のローションにしろ！！」

「さっきも言ったけど、僕は君を追い込んでみたいんだよね。だから、容赦してあげないよ？」

「っ、やだ、マジでやだ、せめて薬はっ」

「ほらほら、怖いのが入っちゃうよ〜？」

「分かってんなら止めろ！そこはガチで苦手なんだって！」

「いいね、本気で腰が引けちゃう村井君をいじめるのは」

「ッ、あ、あああ...っ！！」

明らかにローションとは思えないジェルが、まんべんなく尿道用のブジーに塗られていく。しかも腹立たしいのは、しれっと亀頭にも塗ってきたことだ。おいやめろ、なにちゃっかり別の場所に塗ってんだともがいたけれど、縛られた俺はほ

とんど抵抗できない。それに、軽くでも先端が自分の中に埋められたら、次は暴れて自分を傷つけるのが怖くなる。

ぬ、ぬっと異物が侵入してくる感覚は、何度やっても慣れない。媚薬が塗られていると分かって、射精できなくて苦しい思いをすると分かっている、手が使えない今、それを自力で出す手段がない。

「ほらほら、どんどん入ってく。もう半分は入ったかな？」

「うう、や、やだっ、抜けっ、抜けよお...！」

「じゃあちょっと抜く？」

「っああああ！」

しかもムカつくことに、今までは尿道は絶対NGだったのに、コイツに弄られるせいで、最近は尿道すら新たな性感帯に変わり始めている。痛いだけだった場所からこみ上げてくる快感に、ビクンと背がしなった。ずるりと入っていたブジーが7割ほど外に出ていくと、腰から背骨にかけてゾクゾクと気持ちよさが駆け抜けていく。それからまたゆっくりと中に埋められていけば、今度は太ももがぴくぴくと揺れ始めた。

「んは、はっ、は、あ、あ...！」

「昔はあんなに泣いて嫌がってたのに、すっかり感じる穴になっちゃったね」

「う、るさい...！誰の、せいでっ」

「できれば僕のせいだと嬉しいんだけど」

「んっ、んんううっ！！っく、あ、やめろ、出すか入れるか、どっちかに、しっ、あ、あううっ！！」

「なんか滑りがイマイチな気がするなあ。もうちょっとお薬足してもいい？」

「は！？ふざけんな、いらないっ、いらないって言ってんだろ！！」

ただし、俺の穴を育てたクソ野郎は、人様の尿道にブジーを入れるだけじゃ満足しない男だ。わざと抜き差しを繰り返しては、媚薬を足して、俺の熱がジクジクと耐えがたいほどに疼くまで焦らし続けた。そのせいでブジーの大部分が俺の熱に収まる頃には、俺の頬は涙でぐしゃぐしゃになっていた。

「はあっ、はあ、あ、うう、うううう...っっ！！」

「んふふ。頑張ったね村井君。ちゃんと入れれて偉い偉い」

「っ、黙れよ、変態...！」

「まあそうだよね。ちょっといじめたくらいじゃ、君はまだまだ元気だ」

「ううんっ...！」

身体を赤くしながら涙を零す俺を見ると、変態魔人は嬉しそうに俺を抱きしめて、がぶりと首に噛みついた。なんだか本気で捕食者に目をつけられたみたいで、つい肩がすくむ。あとはその言いぐさ的に、これで奴の目的が果たされたわけではないのも怖い。

実際、俺の背後に回った奴は、次にやりたいことのためにまた何かを持ってきたようだった。それからぴたりと俺の背中にくっついて、まずは俺の後ろを撫でてくる。

「こっちの媚薬の方が、前に塗ったものよりも遅く効いてくるんだけど。でも薬が効くまで待つだけじゃあ、村井君も退屈でしょ？」

「べ、つに、それはっ」

「まあ君が退屈じゃなくても、僕は退屈なんだよね。だから今度は、乳首を責めてあげる」

「ひゃう！？」

すりすりとは片手でアナルプラグを撫でられていたから、完全にそっちに気を取られていた。下を向くと嫌でも自分の熱が目に入るのが嫌で、固く目をつむっていたのも良くなかった。そのせいで、不意打ちで胸に襲った刺激を露骨にくらってしまう。

ぺとりと、冷たい感触の何かが胸を撫でた。それが指でも舌でもなかったのも、驚いてすぐさま胸の方に目をやる。すると視界に入ってきたのは、何かで濡れた筆だった。

「な、なにっ！？何してんだよっ！」

「んん？乳首にもお薬塗ってあげようかなって」

「やっ、いい、もう媚薬は、いらなっ」

「これも人からもらった、けっこうキツめのやつなんだけどね。せっかくだし、たっぷり塗ってあげる」

「くふ、ん、んっ、ん～～…っ！！」

濡れた筆が、ピンポイントに乳首にあてがわれている。するり、するりと左右に乳首をなぞっては、上から下におりていく筆先に、つい腰が揺れた。気持ちいいことは嫌いじゃなくても、アブノーマルなプレイが好きなわけじゃない俺としては、筆での刺激に慣れていない。だからこそ、ほぼ初めての感触に戸惑う。

「んくっ、う、あ、は、はう...っ！」

「村井君は、筆で責められるの好き？」

「っ、し、らな、い、多分、嫌い...！」

「へえ？村井君って、あんまりこういうプレイしたことないんだ。じゃあ役得かも」

「ん、っ、あ、アンタが、変態な、だけじゃ」

「どうかな？でも僕だって、誰にでもこんなに手間のかかることをしたくなるわけじゃないよ。君は特別にかわいがりたいと思うけど」

「マジで、悪趣味...！」

つい、つい、と胸を這う筆の独特な感触に引っ張られないように、俺は意識して奴に毒を吐いた。こうしていれば、至少くは気がまぎれる。というかそうでもしていないと、じわじわ効いてくる媚薬のせいで、頭がぼうっとしてくる。乾く前に潤いを足されていく筆から、乳首にもたっぷりと媚薬が塗られている。徐々にひと撫で分の刺激でも、身体をよじらないと耐えられないくらい気持ちよくなってきた。くそ、感じたくないのに、こんな筆なんかで気持ちよくなってどうすると思うのに、時間とともに中也疼きだした。

プラグを締め付けては、物足りないはずなのに、それでも強く快感を拾ってくる後ろのことも気になる。そっちに意識を向けるな、考えるほどに奴の思うつぼなんだと思っても、乳首をぬりぬりと筆で責められることで感じる自分を見せたくもない。でも射精したい気持ちが込みあがれば、次はブジーの入った前も切なくなってきた、どんどんもどかしさがつのる。

「ふう、ふうっ...！っく、あ、ああ、あ...！」

「どう？じわじわ媚薬が効いてきたころじゃない？なのに筆でしか触ってもらえないなんて切ないね？」

「ッ、う、るさい...！も、やるなら、早く...！」

「そんなにせっかちにならずに、抗ってみてよ。僕に好き勝手されないように」

「んは、ああああゝ...ッッ！！！？」

でも残酷な背後のクソ野郎は、俺が悶えるのをまだまだ楽しむつもりらしい。かといって、ただ焦らすだけにもとどまらない。

筆の柄の所で、わざと胸をぐりっと押された。柔らかい刺激ばかりを受けて、媚薬で感度を高められた場所に、急に強い快感がやってくる。その一撃で、バチンと脳に電撃が走った。だけれど、それは一回だけ。俺に立場を分からせる1発がお見舞いされたら、あとは元の動きに戻る筆が、どれほど憎いか。

「っ、は、あ、ああ、あ、あっ...！」

「さっきより声が溶けちゃってるよ？強めに押されるの気持ちよかった？」

「ち、ちがう、そ、な、わけ、なっ」

「分かりやすく欲しがるなんて君らしくないよ？ちゃんと拒絶しないと。また僕からエッチな悪戯されてもいいの？」

「んんう...！ッ、あ、っく、うう、〜〜っ...！」

だんだん思考もぐちゃぐちゃになっていく俺は、奴の口車に乗るべきなのか、しっかり抗うべきなのかも分からなくなってきた。答えに迷うまま言葉を口にしたら負けな気がして、ぐっと下唇を噛んで首を振る。そんな俺の乳首は、相変わらず小刻みに筆でくすぐられていた。継続的に与えられる柔らかな刺激のせいで、下半身はガクガク揺れていた。筆ごときで気持ちよくなって、奴の目論見通りに感じまくりの様子を我慢することもできなくて、身体がぶわりと熱くなる。もはや、汗が伝う動きですら感じていた。

それに、黙っていたところで愛撫を止めるような相手じゃない。むしろ楽しそうにくすぐすと笑う声が聞こえた気がする。笑ってんじゃねえ、こんな敏感になって、こっちは何一つ笑えねえよと目をつむったら、次はいやらしい言葉が脳に響いてきた。

「乳首、そろそろ触って欲しくなってきた？もう筆じゃないのでクリクリされたくない？」

「っ、っ...！」

「きっと今つまんだりしたら、のけ反るくらいに気持ちいいだろうね。だってほら、真っ赤に尖ってきてる。ほら見て？自分でも見てごらんよ。いやらしく腫れてる村井君の乳首」

「やっ...！み、ない、見たくない...っ！」

「でも見なくても、エッチになってるのは変わらないよ？」

「んんんうう...ッ！ああああ、や、それだめ、もお筆でっ、あ、ああ、やだ、それ嫌っ...！乳首されるの、嫌だってえ...！！」

「こら、前に倒れて逃げないの。嫌だからって隠すなら、もったきつく縛っちゃうよ？」

「ひんんんっ！っく、ひ、ひううっ！はぁ、はあっ、あ、あう、だめ、乳首だめっ、はふっ、ん、ンンンン っ！！」

あとは時間が経てば経つほど、奴が俺の弱い責め方を見抜いてしまうのも最悪だった。ただでさえ敏感になっているっていうのに、たっぷりと濡らした筆で左右に素早く撫でられるのが好きなのがバレて、しつこく続けられるとダメだった。勝手に身体が前に傾いて、自分の腕で胸を守ろうとしてしまう。けれど軽く紐を引っ張られたら、ぐんと背中の方に力が入って、腕も上の方に上がってしまう。

だめだ、胸が露出したら絶対に責められる。また徹底的にいじめられると泣きそうになった。なのに、奴はもちろんそうしない。あえていつでも触れる乳首の周りを筆先で撫でられて、俺は言葉を失った。

「っ...！！？ッ、ん、んん...！」

「ふふ、焦ってる焦ってる。乳首すりすりされと思ったのに、今度は焦らされちゃったね？」

「く、う、っ...！うう、っ、っっ...！！」

今、何も考えずに口を開いたら、なんでと言ってしまいそうだった。なんでって何だよ。なんで乳首を責めないんだとでも言うつもりかと、俺はとにかく唇を噛んで耐えた。でもよくよく考えたら、今日はコイツの好きに責めてもらって構わないんじゃないなかったか。だったら俺が何かを言う分には問題ないはずだ。だけど、後先考えずに言葉を発したら、やっぱり辛くなるのは俺な気がする。

もう分からない。後ろの媚薬なんて、効き始めから時間が経って、中が燃えるように熱いのに、痒みも感じてきている。ひくひくと縁が動くのが嫌だ。乳首だって、今触られたら即イキするくらい高まっている。でも出すための出口は塞がっていて、そちらもクパクパと切なく開閉していた。

ぶるっと、武者震いのように身体が震えた。ふう、と零れた吐息があまりにも熱くて驚く。開いた目から、はらりと落ちていく涙すら熱い。

「あふ...っ！ん、んあ、ああ...！」

「いいね。切羽詰まってる村井君もかわいいよ」

「ひぁうッ！！！？？」

だけれど、混乱している自分が落ち着く暇なんかない。俺を困らせる筆は、とうとう乳首に触らず、なんと下方向に移動した。ぬるんと亀頭を撫でられて、思わず腰が跳ねる。こしょこしょとブジーと尿道口の間をくすぐられた時なんて、耐えられなくてガクンと身体が前に倒れかけた。

「んひいいッ！やぁっ！そこいやぁぁぁっ！！」

「すごい逃げ方してる。ありえないくらい敏感になった場所、筆で撫でられて気持ちいいね？」

「だ、め、ダメダメダメッ！んあゝッ！無理、そこ無理っ、やだやだほんとにキツいいっ！！」

「逃げてもだめ。もっともっといじめちゃう」

「~~~~~ッッッッ！！！！！！」

縛られているから結局逃げられないと分かっているけど、腰は必死に逃亡を試みている。最初は前へと逃げを見せて、それでもダメだと分かったから今度は腰が引けた。ぐんと後ろにお尻を突き出す格好になったけれど、当然2本の筆は追いかけてくる。すりすりとお尻を撫でては、裏筋をくすぐる穂先に翻弄された。逃げなければ、この快感は凶悪すぎると、腰はずっと揺れっぱなしだ。それを面白がる背後の悪魔は、しつこいくらいに俺の熱に筆を這わせる。

「ひいあゝッ！ああああっ！だ、め、もうだめっ、いや、あ、あゝ~~~~
~っっ！！」

「あ〜あ、かわいそう。嫌って言ってもやめてもらえないね？切ない場所、ずっとくすぐられちゃうね？」

「ひんゝっ、んう、っあゝ、あ、は、はぐっ！っくう、うう、も、や、やめ、っ、んんうんっ！！」

「でも、頑張ってるから。我慢上手な村井君にご褒美あげちゃう」

「んぐあっっ！！？や、あああああああああああっっっ！！！！」

けれど、この変態が普通の筆なんかで俺を責めると思っていたのがそもそもの間違いだった。カチ、という機会音と共に、なぜか震えはじめた筆を見て驚愕する。

まさか、持ち手がバイブになっているとは思わなかった。しょうもない小細工が入った筆を使いやがってと、心の中で大きく舌打ちをする。でも、ただ震えるだけの単純な仕組みでも、俺を悶えさせるには十分な威力だった。

持ち手の影響で震えることになった穂先が、俺の亀頭をさらに激しくくすぐっている。そのまま裏筋をふわりと上に撫で上げられたら、一緒に腰も揺れた。ガクンと力が抜けて、口がだらしなく開く。それでも固い意志で抗わなくてはと思ったものの、2本の震える筆で亀頭をまんべんなく撫でられると、もはや気持ちでどうにかなるものではないと分からされる。

「ひいいいっ！！ああああ無理無理無理ッ！！これ、は、だめっ、だめえええええ...っっ！！」

「出せないのに、気持ちいいとこ徹底的に撫でられちゃうなんて切ないね？でもイッちゃうよ？ほらほら、筆がいじめるせいで、出せないままイクイクイク...」

「〜〜〜ッッ！！んんっ、んっ、ん、っ、———.....っ！！」

すりすり、するすると筆が俺の熱を撫でる。振動もあいまって、俺は一気に限界を超えて高められた。だから奴の言う通り、出せないままの絶頂に至るのは秒読みというところに立たされる。

ああ、ダメだ、全然我慢できない。ムカつくけどコイツの言う通り、出せないままにイッてしまう。そう思って、全身がぎゅっと硬直した時だった。

あれほど俺を責めていた2つの筆が、さっと熱から離れていった。だから俺の身体も、達するはずの準備だけが整っていたのに、いざその瞬間が訪れなくて困惑している。

「え、う……っ！！？は、はっ、あ…！？」

「…残念。まだイカせてあげない」

「こ、の…っ！ふざけんなっ！クソっ、マジで何がしたいんだアンタは！！」

「強いて言うなら、気持ちよくてもどかしくって、イキたくて泣いちゃう村井君が見たいかな？」

「んゝ ～～～～ッ！！？」

あえて俺を焦らした変態は、うっとりした声で俺の耳に残酷な言葉を告げる。クソだ。マジで性格がひん曲がっている。いっそこれで、僕も我慢できなくなったと言って、ブチ込まれる方が何千倍もマシだと思う。だってコイツの「まだ」なんて、あと何回寸止めされるか分かったもんじゃない。

ふざけんな、俺をどれだけ弄んだら気がすむと、縛られたままめちゃくちゃに暴れた。それでも、亀頭に震える筆があてがわれるとどうしようもなく、イキたい身体が動きを止める。でもイカせてはもらえないから、いつまでも絶頂にはたどり着けない。

「ひああああ！！あああああイクッ！！もおイク！ッ、ぎ、あ、あああ……！

はあ、はあ、っ…！やっ、もお、なんで…！」

「焦らされて辛い？もっとちゃんと当ててほしい？」

「分かってんならさっさとしろっ！」

「じゃあ今度は、乳首に当ててみようかな？」

「あんんうっっ！！あ、あゝ あ、あっ！！」

「でもなあ、やっぱりちゃんとイカせてあげてもいい気がしてきたなあ」

「ふぎっ！！？んあ、ッ、っ、あ、ああうっ、んっ、はっ、はっ、あああ
あっ！っく、イク、イク、あああああイクイク、イッ、あ、あ」

「はいだめ。まだお預けだよ」

「~~~~っっ！！！」

背後の男は、延々と悶える俺を見ては笑い、絶頂をコントロールして遊んでいる。そして俺も、弄ばれていると分かっているのに、重なる寸止めで頭がおかしくなって、もう制御がきかない。コイツを喜ばせるつもりなんかないのに、毎回律儀にイカされたがる俺を隠すことができない。

「乾いちゃうから、媚薬は足しておこうね」

「っ、も、いい、ほんとに、もお...っ！」

「どうしたの？もう嫌になっちゃったの？まだ始めてから30分も経ってないのに、こんなに早く根を上げちゃうんだ？」

「...っ！」

「まあでも、君が嫌でも関係ないか。だって今日は、僕が好きなこととしていいんだもんね？」

「ッッ！！」

でも限界な俺をあざ笑うように、一時的に振動を止めた筆の柄で、むにりと頬を突かれた。そういう仕草や言い方が、いちいち癢に触る。これにはさすがの俺も我慢ならなくて、思わずはっと鼻で笑った。

そうだ、確かに今日のアンタに制約はない。だけどその代わり、俺が何かを言っ
てはダメな決まりもない。だったらちょっとくらい言い返してやれと、得意げに
笑う変態の鼻を掴んでへし折ってやった。

「アンタ、いちいち俺に確認とらないと、自分が何したらいいかも分かんねえ
の？良い歳して年下の機嫌取りかよ、根性無し」

ふん、と片方の眉毛を上げて、俺よりも社会的に優れていそうな相手を思い切り
見下す。俺の態度にあっけに取られる奴を見るのは、結構気分がいい。

そうだ、そもそも今日は変態の好き勝手にさせる前提ではあるけれど、俺がして
悪いことに関しての制約はない。だったら煽るのも自由だ。できれば生意気な俺
に嫌気がさして、俺から離れていってくれるならそれでもいい。

ほら、萎えろ。目の前の全然かわいげのない男に飽きて、この場で意気消沈して
しまえ。

そう思って、もう一つくらい何か嫌味でも言ってやろうかと思った時だった。

ずっと頬に当てられた筆が下に落ちて行って、トン、と尿道のブジーに当てられ
る。そして次の瞬間、またあの機会音が聞こえてきて、俺はドキリと心臓が跳ね
るのを感じた。

「あ...？や、ああああああああああっっ！！！！？」

震える持ち手が、直接ブジーに当たっていた。金属質な棒を通して、尿道の内側にも振動が伝わってくる。媚薬で感度が高まった内部をめちゃくちゃにかき混ぜられて、俺は一瞬意識が吹っ飛ぶんじゃないかと思うくらい感じた。それでも自我が保てたのは、俺の精神が屈強だったからじゃない。

尿道に入っていた棒は、実はまだ奥に行ける余力を残していた。つまり、最大火力を発揮していなかった。それを俺も分かっていたけれど、自己申告せずにいたから、てっきり奴も分からないまま放置しているんだと思っていた。けれど、奴はあえて見過ごしていたんだ。だから意図的に奥へと押し込まれた時、深い場所にもぐりこんだ棒の先端が、こつりと何かに届いてしまう。

「ふぎ...ッッッ！！！！っあゝ、あああああっ！！うあ、ああ、そ、こ、だめ、やだ、やだっ！！」

「一番良いところには、まだ届いてなかったでしょ？今度はこっちから前立腺も刺激しようね」

「い、やだ、そこはやめっ」

「ダメが通じる相手じゃないって、君が一番よく知ってるくせに」

「ふあああああゝ あゝ ああああっ！！」

振動による刺激で視界がくらんだその先に、もっと狂気じみた快感が待っている。それは快楽主義者の俺が本来喜ぶべきもののなのに、度が過ぎていて手放したくなるほどの威力を持っていた。

ぐりっと奥へとブジーを押し込むように、筆の持ち手が熱から飛び出ている部分にあてがわれる。そのまま内部から前立腺を震えさせられたときの、暴力的な快感といったらない。思わず腰がへこりと飛びあがって、奴の手からどうにか逃げようともがいた。けれど、この悪魔は俺への刺激を弱めないどころか、筆を持たない方の手ですりすり与会陰を擦ってきたり、くにとプラグを押し込んでくる。甘い快感を覚えさせることで、増々俺を混乱させる。

「ひんううっ！うは、あ、あゝ~~~~っ！！」

「いいね。村井君はそうやってだらしく喘いでる方がかわいいよ」

「ッ、死ね、変態！！」

「君を抱かずには死ねないなあ」

「んうううゝうゝっ！！や、だ、も、ちんこバカになるからああ...

ッ！！」

「そうなったとしても、僕がかわいがってあげるから平気」

「うあああっ！はあっ、はう、うう、ううんんッ！！んああ、やっ、やめっ、んっ、あゝ、あ、あくうううう...っっ！！！」

ぬりぬりぬりと会陰をくすぐられると、だらりと口が開く。甘ったるい快感に、自然と身体が開いていく。でも内側から与えられているのは、めまいがするほどの快感だ。きっと栓がなければ、とめどなく射精しているほどの。だから頭が狂う。どっちの刺激に集中したらいいか分からずに戸惑う。そんな俺の首筋を舐め上げて、エッチだね、と囁く後ろの男が大っ嫌いだ。

「んんんっ！んは、はっ、はっ、くうう...っ！！」

「辛そうだね、村井君。そろそろこのブジー、抜いてあげようか？」

「ふああああっ！！？」

でも、自分では絶対に抜くことはできない棒が、ずるりと上に引かれた時。ぶわっと俺の中で、快感の塊が爆発したような気がした。あとは射精へ向かっていく期待感で、脳がとろけそうになる。くは、と情けない息を吐いて、思わず下を見た。引き抜かれるのと一緒に、精液交じりの先走りを零す穴を。

「見て？君のここ、イキたいイキたいってクパクパしてる」

「はあ、はあ、ッ、っあ」

「そろそろかな？もう抜けちゃうかな？」

「ッ、ん、あ、は、やく、早く...っ！」

ほんの少し棒が抜けていくたびに、ガクガクと太ももが揺れた。悪戯半分に震える内ももを撫でられると、ぐんと身体が前のめりになる。それでも事故的に抜けないブジーがもどかしい。早く、早く出ていけ。俺に思いっきり射精させろと、涙を流しながら例の場所を見る。

「うあ、ああ、も、もお、いいだろっ！早く抜け、出したい、イキたいいい...っ！」

「そうだよね。媚薬をたっぷり塗られて、こんなにいじめられたんだから、すぐにでも出したいよね。もう会陰をくすぐられるだけで、腰から下ガクガクになっちゃうもんね？」

「ひぐっ、ッ、あ、あああ、やあ、それ、それっ、そこ撫でんのやめろおっ！！」

「んふふ。イキたいイキたい。イキたくて身体おかしくなっちゃうね？」

「〜〜〜ッ！！っあ、は、ッくううう...！！！」

でもサクッと抜いて終わりにしないクソ野郎は、俺が悶える姿をいつまでも楽しんでる。会陰を撫でては、まだ棒の入ったままの場所を抜いて、震える筆で入り口付近をくすぐったりもしてきた。都度変わる刺激のせいで、どの方向から来る快感にも慣れることが許されない。狂う、こんなのマジで壊される。そう思えるくらいには、俺を陥れていた。

だけど、奴の真骨頂はこんなもんじゃない。普通なら、これくらい焦らしたらもう相手も満足だろう。でもコイツがクソ野郎足り得る理由としては、この程度で終わる男じゃないからだ。その証拠に奴は、抜きかけた棒を再び最奥まで押し戻すという、外道も外道なことを平然とやってくる。

「ッ、あああああああうううううっっ！！！！؟؟ん、あ、な、なっ.....
ッッ！！？」

「どうしたの？僕、抜いてあげるなんて言ってないけど」

「っは、あ、かふ、っ、っっ...！」

「ふふ、びっくりし過ぎてちょっと飛んだ？ダメだよ、僕に黙って失神するのは。村井君の限界まで楽しませてほしいな」

「んゝ~~~~っ！！！！？んんうあっ！！あ、あああああああっ！！！！」

全ての期待を台無しにする天才は、俺の前立腺を内側からブジーで一突きした。そのせいでバチンと視界が弾けて、一瞬身体から力が抜ける。けれど、ぐんと縄に体重がかかった気配の後、即座にブジーを抜き差しされて、精液をぐちゃぐちゃにかき混ぜられる感覚で意識を復活させられた。そしてもちろん目が覚めれば、奴からのむごい寸止めが待ち構えている。

「っ、嫌、だ、もう嫌だっ！」

「でも今日は、僕が好きなことをしていいって聞いたんだけど」

「アンタの好き放題が狂ってんだよ！は、あ、や、だ、も、筆はいい...っ！

はあ、あっ、ああ、う、んううううっ！やだ、それはもういいって言ってんのにいい...ッ！」

「そんなふにゃふにゃの声で言われたんじゃ、最高に気持ちいいから続けてって言ってるようにしか聞こえないなあ」

「あああああっ！はあうっ！っひ、ダメダメダメっ、今そこっ、うう、うゝ~~~~っ！」

逃げたいと心から思っても無駄だ。何度だって狂うほどの気持ちよさと、過剰な快感への恐怖を繰り返すばかりで話にならない。先走りが零れる入り口を筆でく

すぐられて、時にはブジーを引かれて、また入れられる。それが嫌で首を振ったら、震える筆と一緒に自身を握られて、上下に扱かれて叫ぶしかなくなる。

「ゃあああああっ！！！！うあああああっ！！っひ、も、やえ、ろ、壊れる、壊れるッ！！」

「気持ちよすぎて壊れちゃうか」

「~~~~っ、あゝッ、あああ...っ！！」

イキたいとか、精液が溜まって辛いとか、後半はそういう次元の話じゃなかった。ただただ失神寸前まで追い込まれる、むごいくらいの尿道責めだった。出せなくたっていい。解放さえしてくれればそれでいいと、頭をぶん殴られるような快感の中で思っていた。

「あゝはう...っ！っ、あ、あゝッ」

「もうこの体勢は辛いかな。そろそろ楽な格好に変わろうか」

ただし、呼吸もあやふやになってきたころ、ようやく奴も満足に至ったらしい。俺を吊り上げていた縄が緩んで、背中側の拘束がほどけていく。そうすることで楽にはなるものの、身体の支えを失った俺は、どちゃりと前に倒れ込んだ。腕がベッドについて、腰だけが高く上がる。

ただどこで、休憩にはならない。あくまでまだまだ責める気満々の奴は、今度は別の場所に狙いを定めていた。

「さあて、こっちはどんな感じかな？」

「あうっ！」

後ろの変態に突き出す格好になったアナルの縁が、しゅるりと筆でくすぐられた。独特な感覚に、ビクンと腰が跳ねる。それでもしつこく刺激されるのが嫌で、俺は腕と膝の力を使って前に逃げた。

「っ、やめ、ろ、やだ、やだっ...！」

「こんなのじゃ足りない？もういい加減入れて欲しい？」

「ううっ...！」

でも俺を追いかける悪魔の手が、肩に伸びてくる。ぐっと下に押さえつけられたら、へろへろの俺は身動きが取れない。シーツに額を擦りつけてみても、ぬりぬりとアナルプラグの周りを這う筆から逃げられない。

それに何より悔しかったのは、身体よりも心が言いなりになっていることだった。アイツの煽り文句に、即答で違うと言いたかったのに。自分の口から、たった一言が出てこなかった。入れてほしいわけがないと言えなかった。おそらく一番キツイ薬を使われたアナルは、想像以上に疼いていてし熱い。

心底悔しいけれど、奴の言う通りだ。もうアナルプラグじゃ物足りない。指でもバイブでも何でもいから、とにかく中を擦ってほしくてしょうがない。

「分かってんなら、焦らすな...！もお、早く...ッ」

背後にいる奴の方を向かなかったのは、俺の意地だった。きっとニヤついているだろう最低男の顔なんか見たくない。それに、これ以上弱みを晒したくもない。ぐちゃぐちゃに溶けた顔を隠すのは当然の防御策だった。

「丸一日かけたわけでもないのに、君がそこまで言うなんてね。やっぱりこの媚薬の効果が凄いのかな？」

「あああう...！」

ただし素直になること全てが悪いわけでもなかった。意外にもアナルに蓋をしていた異物はすぐに抜き取られていって、俺としては拍子抜けなくらいだった。なんだ、尿道であれだけ無茶をしてきたから後ろも散々焦らされるかと思ったのに、今日はすんなり入れるんじゃない、なんて。

そう思った俺は、またしても奴の思い通りの反応を返してしまう。

「さあ、これで邪魔なものはなくなったね。それじゃあ、追加のお薬塗っていいか」

「は！？ふざけんなっ、何言って」

「ふざけてないよ。ほら、腰をあげて」

「ッ、ひ！！？」

確かに微動だにしないプラグが抜けたことで、妙に焦らされる時間は終わった。でも、俺は抜けた孔には何か別のものが入ってくると思ったんだ。まさか熟れ切った場所に、まだ媚薬が塗られるとは思わないじゃないか。

アナルの周りを這う筆は、たっぷりと潤っていた。ぺとり、ぺとりと塗られる粘性の液体が、ローションだったらどれだけよかっただろう。乳首はこの媚薬を塗られて、相当感度を上げられた。なのに既に媚薬が浸透した場所に、追加で塗られていくなんて。

「やっ、嫌だ！もう薬はっ、い、いらな、あ、あ、やっ、塗るなあ！」

「ふふ、キツイねえ。ただでさえ真っ赤になってるのに。これ以上敏感にされたら困る？」

「ひ、う、うう、あ、や、だ、あふっ、ッ、んん、んんう...っ！！」

「筆だけでこんなにトロトロになっちゃって。村井君らしくないよ？」

「は、あ、あ、ッ、こ、んな...っ！はあ、はあっ、も、いいだろ、もお、もお...ッッ！！」

「そんなかわいい声でおねだりしたって無駄だよ？今日は君のこと、狂うまで焦らすつもりだから」

「あううう...！？う、んっ、んくううう...！！っひ、あ、だめ、広げたところ、やめえ、ッ、んゝ ～～～っっ！！」

もちろん、簡単に媚薬を塗られていいわけがない。だから俺は、縛られたままで必死に暴れた。でもあまり暴れすぎると、尿道のブジーを自分で奥に押し込むことになるから、少なくとも腰は高く上げておかないといけない。それが奴にとっては好都合なのが分かって、腰を下げることは出来なかった。だから片手でアナルを広げられて、粘膜をくすぐるように媚薬が塗り込まれていくのを防げない。

「くふ...っ！！っうあ、あ、はう、んんっ、ひ...！ああ、やっ、やだ、そこやだ、もう筆は嫌だああ...ツツ！！」

過敏な場所を筆でこしょこしょと撫でられると、泣き叫びたくなるくらい気持ちがよくて、心が折れそうになる。こんなふざけた道具で気持ちよくさせられるのが、惨めで仕方ない。なのにイクこともできない。自分には何一つ決定権がない現状に、俺は打ちのめされていた。

なんてむごい。むごすぎる。もう俺は軽く失神するくらいまでいじめられたのに。なんでまだ焦らされなきゃいけないんだ。そう思った俺は、ボロボロと寝具に染みを作るくらい泣きながら、きつくシーツを握って怒鳴っていた。

「なんでっ...！なんで今さら焦らすんだよ！！最初はあるなにごちゃぐちゃに抱いたくせにっ！やめろって言ってもイカせたくせに！！なのに、なんで今、そんな風に...！」

「それは何？どういう方向で怒ってるの？」

「ダラダラしてねえでさっさと入れろっ！！」

「ん～、でもねえ。いつ入れるかは僕が自分で決めたいからさ？君に言われて入れたんじゃ、根性無しって言われちゃうかもしれないし」

「くうう...ツツツ！！！？」

だけど俺が年甲斐もなく怒鳴ったって、奴の行動を促すことにはならない。むしろ、ぬぷりと一本だけ入ってきた指に、軽く前立腺を押されて悶えるだけになった。それだけの些細な刺激に、息が止まるかと思うほど感じたのも驚きだ。

すりすりと擦る指の動きは、もはや適当とも言えた。そんな指使いにすら負けていた。自分がとんでもない身体に仕上げられていることを、深く理解させられる。

あとは自分が根性無し呼ばわりされたことを、ちゃっかり根に持っていたのも腹が立つ。しっかり効いてんのかよ、だとしても俺の身体で苛立ちを発散するなと、甘い快感に全身を侵されながら思った。

「こっちは今日あんまり弄ってないのに、腰へこすごいねえ」

「はうう、うっ、ああ、だ、め、そこっ、そこお...！」

「でもせっかく頑張ってくれたから、指以外でかわいがってあげる。今日はね、色々持ってきてるから。新しい玩具を使ってみようね」

「ん、んんっ！？」

そして俺に自分の身体の状態を伝えた指は、それ以上の目的はなかったのか、あっさり抜けていってしまった。そのかわりに、俺の中には長い棒が2本入ってきた。固く冷たい棒は、先だけが丸い。ビー玉よりも小さな球体が入ってくる感覚は、正直何とも言えなかった。

「あ、あ、何、なにっ、これ...！？」

「先のところ、丸くなってるの分かる？これ、棒のところは何でもないんだけど、先端のところにバイブ機能がついてるんだって。だからこれからこのバイブで君の前立腺を挟んで、いい場所だけに押し当てて、たっぷりほぐしてあげる」
「ッ...！！??」

けれど、ただの棒だと思っていたものに、変態向けの機能が備わっていたのは想定外だった。ふざけんな、さっき指だけであんなにとろけるほど気持ちよくなってしまった場所を、震える球体で挟み込むっていいのか。ありえない、そんなことしたら許さないと、俺はじりじりと前に進みながら、前立腺を狙えないよう腰を揺らした。それでも的確に位置を把握する背後の男は、いとも簡単に棒の先で前立腺を挟んでくる。

こりっとしこりが揉まれる感覚に、背中がぞわりとした。もしもこの棒が今、震えたりなんかしたら。

「ッ、い、やだ、やめろっ、やめろっ！！」

「さっきは早く入れろって言ってたじゃない」

「違う、それはっ」

「さいっこうにやらしい声聞かせてね？」

「っ、ひ——ッッッ！！！！????」

ー続きは本編にてお楽しみくださいー